

# 近世後期江戸語資料における動詞「似る」

上野左絵

【キーワード】 似る アスペクト タ テイル

## 1. はじめに

現代日本語において、完成相と継続相というアスペクトの対立は「ル」／「テイル」の対立によってあらわされる。この継続相をあらわす「～テイル」の形（以下テイル形とする）は、中世末期頃から頻繁に使われるようになったということが知られている。

一方で古典語におけるアスペクト標示形式である過去・完了の助動詞「ツ・ヌ・タリ・リ」は「～タ」の形（以下タ形とする）ひとつに収斂していく。かくして古典語において助動詞が担っていたテンス・アスペクトの役割はタ形が担うこととなり、その一部をテイル形が分担するようになったと考えられる<sup>1</sup>。

しかしながら、近世においてすでにタ形とテイル形のアスペクト的意味が明確に分化していたかという疑問である。上野（2004）において洒落本を資料として後期江戸語のアスペクト表現を観察した際にも、いくつかの動詞において《A》状態をあらわすテイル形が期待される場面でタ形が用いられ、《B》テイル形の場合もタ形の場合もアスペクト的な意味が変わらない、という例が見られた。ただ洒落本という限られた資料中には用例数があまりに少なく、その要因について考察するには至らなかった。その後扱う資料に黄表紙と滑稽本を加え、上記《A》《B》の条件を満たす例を探したところ、特に「似る」という動詞についてさらに用例を見出すことができた。本稿ではタ形とテイル形がアスペクト的にどのように使い分けられていたか、後期江戸語資料における意味のあらわれ方について動詞「似る」に注目して考察する。

## 2. 「似る」のアスペクト的意味と研究史

先行研究において、動詞「似る」はアスペクト的にどのようにとらえられているか、以下に先行研究による分類を挙げる。

日本語の動詞アスペクト研究の出発点ともいえる金田一（1950）において、動詞は第一種：状態動詞<sup>2</sup>、第二種：継続動詞、第三種：瞬間動詞、そして第四種の

<sup>1</sup> この統合に関する通時的考察は山口（1997）、高山（2000）などに詳しい

<sup>2</sup> 後述する鈴木泰（1992）の分類における「状態動詞」とはその内容が若干異なる。鈴木（1992）での状態動詞とは、金田一の状態動詞と第四種動詞とを含むものとなる。

動詞に分類された。今回取り上げる動詞「似る」は第四種動詞に分類されている。第四種動詞とは、

「時間の観念を含まない点で第一種の動詞と似ているが、第一種の動詞が、ある状態にあることを表わすのに対して、ある状態を帯びることを表わす動詞と言いたいものである。例えば「山が聳えている」の「聳える」がこれである。(金田一 1950)

と説明されるもので、「似る」に関しては、

「富む」「似る」の二動詞も瞬間動詞として用いられることも少くないが現在では第四種の動詞として用いられることが多い。

と言及している。

金田一に従えば動詞「似る」はアスペクト的対立を持たない「動作状態性動詞」<sup>3</sup>に分類されそうだが、鈴木重幸(1957)では「似合う」は動作状態性動詞と分類するものの、「似る」は瞬間性動詞(動作性動詞の下位分類の一つ)に属すると記述している。

工藤(1995)では、「アスペクト対立の有無による動詞分類」として動詞を大きく三分類した。

- (A) 外的運動動詞 (開ける、切る、殺す、食べるなど)
- (B) 内的情態動詞 (思う、考える、信じる、望むなど)
- (C) 静態動詞 (ある、いる、値する、甘すぎる／存在する、異なる、意味する／優れている、精通している、そびえている、面している)

アスペクト対立を持つ(A)と持たない(C)、そのどちらにも所属させにくい動詞のグループが(B)という考え方である。このうち「似る」は(C)静態動詞に入る。

(C) 静態動詞(static verb)は、時間のなかへの現象を問題にしえない「異なる、意味する」や「甘すぎる、優れている」のような〈関係・特性〉をとらえているか、時間のなかに現象したとしても、時間的展開性のない、「いる、存在する」や「そびえている、面している」のような〈存在・空間的配置〉をとらえている、スタティックなものである。したがって、このような動詞らしくない動詞においては、スルーシテイルのアスペクト対立が成立しえない。「ある、甘すぎる」にはシテイルがなく、「優れている、そびえている」にはシテイルしかない。「存在する／存在している、異なる／異なっている」には、形式的にはスル、シテイ

<sup>3</sup> 鈴木分類において単に状態性動詞というばあいには存在動詞と「～すぎる」「～きわまる」を指し、金田一が状態動詞としたものの中にも動作の意味を認め、動作性動詞と状態性動詞との中間的な動詞として「動作状態性動詞」を設定している。

ルがあるが、アスペクトの意味の違いにむすびつかない。(工藤 1995 p. 70)

更に下位分類では、「にている」を(C・3)関係動詞に、「にあう (にあっている)」を(C・4)特性動詞に分類している。動詞分類の一覧に「似る」ではなく「にている」とテイル形で示しており、上記引用部分の定義から考えて「シテイル」しかない動詞とみなしているものと考えられる。しかし例えば、

- (1) 「学校じゃ隅の方に小さくなってるのよ。ほんとにお前さまに似たのですわ。顔立ちは少しお父様似のところもありますけれど」

(北杜夫『検家の人びと』)

というようなばあいにはタ形も存在するし、時間を問題にしない関係をとらえていると同時に、子供が父親に「似る」という変化を遂げる、変化の局面をもとらえていると解釈できる。

工藤(1982)では、テイル形の派生的意味である「単なる状態」について、①主語が意味上、状態主体でしかありえず運動主体になりえない場合 ②主語が総称的である場合 ③主体のアクチュアルな運動が問題となくなくなって、二格をとりつつ存在文化する場合 の三つの条件下では動き動詞からも変化動詞からも発生すると指摘している。「似る」がテイル形で述語文をつくるばあい「AはBに似ている」という形をとることがほとんどであろうが、このとき上記の条件①があてはまることになる。そうすると仮に動詞「似る」を変化動詞と分類しても、それがテイル形で単なる状態をあらわすことに変わりはない。先に鈴木重幸(1957)が考慮したのはこのような点ではないだろうか。

ここまで現代日本語のアスペクト研究における動詞分類を見てきたが、古典語について『源氏物語』を資料とした先行研究が鈴木泰(1999、初版 1992)である。工藤(1987)における動詞の分類を元に、A～Hの分類を行い、さらに詳細な下位分類を施しているが、「似る」はHの状態動詞とされる。

#### H 状態動詞

810 存在・能力(あり、聞きおはす、覚ゆ、侍り、見ゆ、など基本的に～タリ・リ形では用いられないもの)

811 特徴・関係(愛敬づく、思ひ居る、似る、なまめく、まさる、など基本的に～タリ・リ形でしか用いられず、金田一春彦(1950)の分類で第四類の動詞に当たるもの)

「基本的に～タリ・リ形でしか用いられず」という点が注目される。

以上見てきたように、動詞「似る」は動詞でありながら基本的にその運動・動作は問題とされない、状態性の強い動詞ととらえられてきた。

構文としては「～に似る」「～と似る」と、二およびトと共に起するが、数としては圧倒的に二格の方が多い。これは「似る」がトに下接するようになったのが比較的新しいためとされる(鈴木英夫 2001)。なお森脇(2004)で『枕草子』三巻

本に「藤の花といとよく似て」という用例の指摘があるが、能因本では「に」となっているため、確定例とはしていない。

### 3. 各時代での状況

「似る」が動詞分類上どのように位置づけられているかは以上見てきたとおりだが、実際にどのように資料にあらわれるのか、古典語から今回調査した後期江戸語まで、先行研究を参照しつつ見ていく。

#### 3. 1. 古典語

2. で見たとおり、鈴木泰（1999）では古典語における動詞「似る」は状態動詞に分類されており、状態動詞は「基本的に～タリ・リ形でしか」用いられないとしている。試みに『源氏物語』で確認してみると、動詞「似る」の全用例 120 のうち、終止法で用いられているものが 20 例見られ、そのうち下記に挙げたテイル形（「て侍る」）<sup>4</sup>と助動詞・補助動詞がつかない形（以下ル形）が各 1 例見られた以外は、18 例すべて「タリ」もしくは「リ」が後接している。例外ともいえるテイル形とル形の例を以下に挙げる。<sup>5</sup>

##### 《テイル形》

- (2)侍従、よりて、「昨日の物は、いかゞせさせ給ひてし。今朝、院の御覧じつる文の色こそ、にて侍りつれ」と、きこゆれば、「あさまし」とおぼして、涙の、たゞ、出で来に出で来れば、（若菜下 柏木から女三宮に宛てた文について）

##### 《ル形》

- (3)ひとへにうちとけ、頼み聞え給ふ心むけなど、らうたげに、若やかなり。  
似るとはなけれど、なほ、はゞ君のけはひに、いとよくおぼえて、これは、かどめいたる所ぞ添ひたる。（胡蝶 玉鬘の姿に母夕顔の面影を見る）

なおタリ形の用例「（AはB）に似たり」のAを實際目に（音の場合耳に）しながら「Bに似ている」と判断するばあいがほとんどであるが、「～ノヨウダ」という意味で用いられる比況表現「～に似たり」では必ずしも目にしているとは限らない（この点は後期江戸語について後ほど詳しく述べる）。ここでは比況表現と考えられる例が 3 例ある。

- (4)むかしより、秋に心よする人は、数まさりけるを、名だたる春の御前の花園に心よせし人々、又、ひきかへし、うつろふけしき、世のありさまに似たり。（野分）

- (5)「人の上にては、もどかしきわざなりけり」と、つれなく答へてぞ、ものし給ひける。昔の父おとゞたちの御なからひに似たり。（螢）

<sup>4</sup> 本論では「て侍る」「ておる」「てる」について「テイル形」という用語で代表させた。

<sup>5</sup> 以下用例を挙げるにあたって、旧字体は新字体にあらためた。

この比況表現の「～に似たり」は築島（1963）において「仮名文学作品には殆ど見出されない幾つかの語」「訓読語資料にだけ見出すことが出来、しかも和文にも、又上代文献にも見出すことが出来ない」語の一例として挙げられている。同じ意味をあらわすのに一般の和文の類では「やうなり」が用いられるとされる（第六章第三節「土左日記と漢文訓読」）<sup>6</sup>。源氏物語においては上記3例の「～に似たり」に対して、「やうなり」は26の用例<sup>7</sup>が見え、うち9例は会話文中にも用いられる。

また用例(3)において語義的な面で注目されるのは、玉鬘の様子が『似る』ではないけれど母の姿に『おぼゆ』とされている点である。動詞「似る」は「おぼゆ」に比べて客観性が強い語として用いられていると考えられる<sup>8</sup>。

### 3. 2. 中世末期

中世末期の資料において、「終止法で状態を表している場合」を調査した先行論文が福嶋（2002）である。『虎明本狂言』や『天草版平家物語』、『醒睡笑』他多数の資料から、「～タが終止法で状態を表している場合」、すなわち現代日本語ならばテイル形が期待されるばあいにはタ形が用いられることがあるものとして、「知る」「持つ」「書く」「似る」「済む」「違う」といった動詞を、延べ135例、異なり49例挙げている。動詞「似る」は上記に挙げた自動詞中、用例数のトップ（14例）である。また同時に「～テイル・～テアル」「～タリ」についても「終止法で状態を表している場合」を調査し、存在様態という概念から、

(37) 中世末期日本語の終止法で状態を表している～タについて

- ①～タには存在様態を表している例が少ない。
- ②～タをとる動詞には、変化を意味する動詞が多いが、その中に主体の姿勢の変化を表す動詞や主体の位置変化を表す動詞は少ない。
- ③～テイル・～テアルには制約があったため、～タがそれ以前の～タリに引き続き、当時の～テイル・～テアルの表しにくい状態（主に存在様態から遠い状態）を表していたと考えられる。

と結論づけている。なお存在様態とは、野村（1994）の提唱した概念で、「庭に木が三本立っている。」というような文を、

単なる「ある」には認められない意義、「存在の様態」「物がどのように

<sup>6</sup> 森脇(2004)で指摘。

<sup>7</sup> 終止法の用例数。

<sup>8</sup> 新日本古典文学大系（新大系）では「似るとはなけれど」の部分の頭注で「亡母夕顔に容貌が似ているほどではないが、やはりその面影をしのばせる点があるとする」と解釈しているのに対し、日本古典文学大系（旧大系）では「おぼえて、…」に「思われて一似て居てしかも（て）、これ（玉鬘）は才気ありげな点が。」としている。ここは新大系の解釈を採用した。

あるか」が述べられている。(中略) 様態をも示した存在文(野村 1994)として「単なる状態」とは分けて考えている。テイル文、あるいは「動詞+リ・タリ」文のなかで「存在文としての性格がはっきりしているもの」が存在様態であり、もっとも形容詞文的なものが単なる状態ということになる。

以上のように、中世末期の日本語において終止法で状態を表しているタ形は少ないとしながらも、後に見る後期江戸語に比べると多少バリエーションを持つようである。

### 3. 3. 後期江戸語資料

後期江戸語資料における動詞「似る」の出現状況は、下記のとおりであった。調査に使用した資料は本稿の末尾に付す。また採集する用例は、終止法で用いられているものを対象とした。他の助動詞が後接するものも対象に含めたが(タリケリなど)、受動・使役態のばあいや、否定・推量のムードは対象外とした。尊敬の助動詞や「給う」を伴った形についてはアスペクトに影響がないものとして調査対象に含めた。

《表 1》

形式		タ形		テイル形		タリ形		計	
用例数		7		9		11		27	
会話	地	7	0	9	0	3	8	19	8

タ形・テイル形・タリ形ともすべての用例は二格をとり(あるいは省略され)、トをとる例は見られなかった。

文体という視点から見ると、タ形・テイル形<sup>9</sup>とも会話文にしかあらわれない。タリ形は地の文・会話文ともにあらわれるが、3例の会話文のうち2例は、話者が「下手の考休むに似たり」ということわざを引用しているもので、純粋な会話文とはいえない。残る1例は『春色梅児誉美』のものであるが、話者が侍でありこれも例外といえる。ここではタ形・テイル形とタリ形は文体による使い分けがはっきりなされているといつてよいだろう。

また地の文にあらわれたタリ形8例については、「(AはBに) 似たり」のBが動詞であるものが3例見られた。

(6) はりあるやうにてつよからずいはばよき女のなやめる所あるに似たり  
(『古今馬鹿集』)

(7) 小妓かひは聞へもあしく。物入などおしむに似たりと。表てむきは揚巻にて。実は巻絹が一客なり。(『大通秘密論』)

<sup>9</sup> テイル形には「テオル」「ヨル」を1例ずつ含むが、「テアル」の用例は見られなかった。

(8) たをやかなるその道中。駒下駄はまりくつのことく。てうちんはけるににたり。『契情買虎之巻』

この「～に似たり」という比況表現は、後期江戸語においてもこのままの形で用いられ、タ形あるいはテイル形にすがたを変えることがなかったと推測される。

3. 1. でも触れたとおり、この「似る」の用法は中古には「やうなり」と同義に用いられた漢文訓読語由来の比況表現であるが、Bが名詞である場合に比べて、類似点が抽象的であることがわかる。AおよびBが両方とも名詞である場合には、比較する両者の特性が目に見える、あるいは過去に見たことがあり具体的に回想できるが、Bに動詞をとる用例では、「よき女のなやめる」「てうちんはける」という事態が目の前にあるわけではなく、また実際に見たことがあるとも限らない。発話者自身のイメージに拠っていることになる。

なお今回の調査資料中、比況表現として終止法で最も多く用いられているのは「やうだ」の形で、45例見られる。比況の「～に似たり」が地の文のみに用いられるのに対し、「やうだ」は会話文専用となっている。

(9) 《清》さふいいなされはアノあるき様はやつぱり雲の上を行様だねへ（『深淵情』）

(10) 「エ、畜生めエ。新内だナ。こてへられねへ。鶴吉婆さんが出たやうだ（『浮世風呂』）

(11) 何んだ。大きな軒だ。木挽小屋を。みる様だ。（『寸南破良意』）

特に上記(11)の「みるやうだ」については、その後「みたやうだ」→「みたいだ」へと変化していくとされる。今回の資料中では、終止法での「みるやうだ」が7例あったが、終止法で比況の「みたやうだ」は一例も見られなかった。ただし湯沢(1954)には終止法での「みたやうだ」の用例が多数挙がっており<sup>10</sup>、時代的特徴、あるいは何らかの使い分けであるとは断定できない。なお終止法以外の用例は連用形「みたやうに」のみ4例見られ、うち3例は浮世風呂からの用例であった。

(12) 大津画の福祿寿を見たやうに天へとゞきさうな天窓アして、牙をむき出してにらめ付らア（『浮世風呂』）

(13) 次郎 何だか。雨落のきしやご見たやうにしやれのめすよ。（『辰巳之園』）

なお「やうなり」の形では2例、「～に似たり」と同様、いずれも地の文にあらわれる。

(14) 《花》は吉がせなかをさすりながら「もふいくつだ」

《吉》「十六さ」といふこへも口へつわのたまつたやうなり

（『山下珍作』 「」は本稿筆者が付した）

(15) 《ふせき》ヲヲサよつちやア居ねへからマアねろねろ。【と。ねかす】

<sup>10</sup> 『角鶏卵』『二蒲団』『七偏人』など。

跡は大風の吹たやうなり (『寸南破良意』)

森田 (1989) には、現代日本語の「似る」と比況「ようだ」について、

比況「ようだ」は、当人にとってAがBと感じられるさまに用いる。「似る」は、AとBとを比較して、その類似性を客観的にとらえる。“AはあくまでAなのだが、ある面においてBに近い”という判断である。(「似る」の項)

とし、判断の客観性を違いとして挙げている。「やうだ」はある状況が自分にとってそのように感じられる、という主観性を帯び、ひいては「へ、どふやらはづかしいやうだ」(『東海道中膝栗毛』)のように、自分の気持をあらわすことがあり、比況表現の判断は客観と主観の境界でなされるように思われる。一方動詞「似る」での判断は客観的である。そして比較する物事が具体的に目の前に(あるいは経験が)なければ、客観的な判断を下すことは難しい。比況表現の「～に似たり」と「似る」との違いについては、話者の実際の経験という点を考慮することもできるだろう。

さて、ここで問題になるのは、夕形であらわれた7例である。

(16)《善・幸》いい人からたの誰にか似たようだ (『青楼楽美種』)

(17)《らい》その伝五郎といふは。かたき役か色事しか

《とみ》いろ事しでござりやす

《らい》それか。わしににたといふのか

《とみ》しかみひばちを。わらずにそのまま

《らい》なにやらを

《とみ》イイエうりを二ツにさ (『妓者呼子鳥』)

(18)《客》おれも随分こたへていたが後からぞつと仕そふな所を前からぞつとしたからこらア畜生や化物じやアねエ鬼じやアねエかしらんと思つたらとほうもなくこわく成たつけ思ひなしかぬしの兒によく似たよ

(『当世左様候』)

(19)「愚僧が世をのがれしは、ちやうどそこもとほどな倅におくれ、それを菩提の種といたしたが、そこもとによく似ました。もふ／＼どつちへも行かずに、此庵にいつまでもとどまり、三年なら、來年望みのとおりで道さつしやれ。南無阿彌／＼。」 (『敵討義女英』)

(20)ばゞ「わしや此あいだ、ひとりのむすこをうしなふたが、そのむすこにアノおかたが似たとこそいへ／＼

(21)弥次「ハアおいらに似たとかへ。それじやアおめへのむすこもいゝ男であつたろふに。おいしいことをした

(22)ばゞ「ソレそのどうまんごへのものいひから、おまいのやうに、やつとあらいみつちやがあつて、色がくらふて、はなは獅々鼻とやらで、目のいつかい所までが、其まゝじやわいな／＼



弥次「それじやアわつちが顔のわるい所ばかりがよく似たの

『東海道中膝栗毛』 上記3例は続きの文)

これらの用例の特徴としては、

- ・二格をとり、基本的に「AはBに似た」という構文にあてはまる。
- ・「AはBに似た」のBは名詞であり、Bが動詞をとる「～に似たり」のような比況としての使い方はされていない。
- ・発話者は「似る」の主語(A)を現在見ているか、あるいは過去に実際見たことがある。比喩としての使い方はされていない。

ということが挙げられよう。この3点は、そのままテイル形の用例にもあてはめることができる。

(23)《綱》それは。御苦労さホンニ三沢さん。お前の何さんは。富さんに似て居なんすね(『甲斐新話』)

(24)《三》アイしづかな。所なんざあ。いつそ。よく似て居いすよ(『甲斐新話』)

(25)《錦木》ぬしやあ染山さんの糸さんによく似ていなんすね(『山下珍作』)

福嶋(2002)の調査からは、中世語末期資料においては「似る」以外にも多くの動詞が先に挙げた条件《A》《B》を満たす形であらわれていることがわかるが、中でも最も多く見られた「知る」について本資料中に用例を探してみると、「似る」ほどの例は挙がらない。「知る」の終止法のテイル形50例に対しタ形は7例あるが、そのうち6例は「知ったことか」「知りません」という意味の「しったか(へ)」という洒落本に特徴的にあらわれる言い回しであり、アスペクトを問題とするものとは考えられない。それ以外の例でも条件《B》にあてはまる確例は見つからなかった。また「持つ」については『東海道中膝栗毛』に見える

(26)兵五「アニ女房だい、見たくでもないヤア。これ弥次郎兵衛、お身女房をもつたか。エレ／＼是非に及ばない。縄をかゝれ。國元へひいていかずに(『東海道中膝栗毛』)

の例が唯一「女房がいる」という状態をあらわすものと解釈できるが、「結婚した」という結果の存続とも受け取れる。「書く」「済む」には該当例がない。「違う」には

(27)《お長》しらねへで。どうする物ンだ。神明から来たお市

《大工》ちがつたちがつた

《お長》何ちがう物ンだ。ぜん躰。あの子に。ほれて。此中も。この国やへ行て。呼だじやアねへか。(『寸南破良意』)

ほか3例が該当例と見られるが、数としては「似る」の半数である。その他すべての動詞について調査したわけではないが、《A》《B》の条件を満たす用例がまとまって見られるのは「似る」に特有の現象であるといえよう。

研究史で見てきたように、現代日本語研究における分類では、「似る」はほとん

ど例外なく「テイル形のみであられ aspekt 的に対立する形を持たない」とされているのだが、近世後期においてははまだテイル形専用とはなっていないようである。中世後期に同じくタ形で状態をあらわしていた動詞「知る」は近世後期において圧倒的にテイル形が多くなっており、「似る」は変化に取り残されたようにも見える。他には「違う」<sup>11</sup>などわずかな動詞にいくつかタ形で状態をあらわす例が見られるのみである。

#### 4. まとめ

以上、動詞「似る」について先行研究の成果を参照することで、後期江戸語における用法を通時的に位置づけてみると、次のような特徴が確認された。

- ・「似る」は格助詞ニと共起し、トをとる例は一例も見られなかった。
- ・タ形・テイル形ともに会話文中に専用され、タリ形との文体による使い分けが明らかである
- ・タリ形については動詞連体形＋ニをとる比況表現が見られる。この用法はタリ形で定形化しており、タ形をとることはない。また動詞「似る」と比況表現「似たり」とは、発話者が「似る」と判断する際の客観度の違いにおいて異なると考えられる。
- ・中世末期資料において多くタ形で状態をあらわしていた動詞も、後期江戸語資料ではテイル形をとるものが多く、「似る」はタ形の用法を多く残す特殊な動詞といえる。

高山（2000）では、虎明本狂言の調査結果で「同じ動詞が同じテンス・アスペクトの意味を表わすのに、シタ形をとる場合とシテイル形をとる場合の両方がある」ということから、虎明本の段階で実際の話し言葉では、シタ形ではなくシテイル形が結果の状態・存続を表わす形式として主流をなしていた、と推察しているのだが、「似る」については後期江戸語の資料においてもタ形があらわれる。なぜ「似る」についてタからテイルへの移行が遅れたのか、またこのような動詞は「似る」の他にも存在するのか。状態動詞を中心に他の動詞についての調査が大きな課題として残る。

なお今回の調査は用例を終止法のばあいに限ったが、連体修飾の形になるとタ形が大きくテイル形を上回る。「似る」について見てみると、連体修飾 35 例中 26 例がタ形、6 例がタリ形であり、テイル形は

---

<sup>11</sup>動詞「違う」は

＊しかし深川などはあんばひが。よし原とは大にちがふ。（『傾城買指南所』）  
のように、ル形で状態をあらわすため、条件《A》はテイル形ではなくル形「似る」が期待されることになる。なお今回テイル形は次の一例のみ見られた。

＊御門番のせうぶ草にお薬をかつてちいさくなくて御門を出道入ウするちんころウ  
見るやうな野郎たア違てゐるハイ（『南客先生文集』）

(28)《とみ》おまへに似てゐるアノ市山伝五郎とやらか。ほんにしみしみすきやした(『妓者呼子鳥』)

(29)《さくらき》いいゑさ。あのかけじにとんだよく似ていなんす人でおざんす。(『一事千金』)

のわずか 2 例である(残り 1 例はル形)。また現代日本語においても状態動詞のテイル形は連体修飾節にすると主にタ形をとり、テイル形による連体修飾は近世から現代の間すっぽり抜けたようになっている。タ形とテイル形がどのような変遷をたどったのか、連体修飾節について調査・考察することも今後の課題として挙げたい。

### 【参考文献】

- 上野左絵(2004)「江戸語のテンスとアスペクト―洒落本を資料として―」(修士論文)
- 奥田靖雄(1978)「アスペクトの研究をめぐって―金田一的段階―」『宮城教育大学国語国文』8 宮城教育大学国語国文学会
- 金水敏(1993)「いわゆる「進行態」について」『築島裕博士古稀記念 国語学論集』汲古書院
- 金水敏(1997)「現在の存在を表す「いた」について―国語史資料と方言から―」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房
- 金田一春彦(1950)「国語動詞の一分類」『言語研究』151 日本言語学会(『日本語動詞のアスペクト』1976 麦書房に所収)
- 工藤真由美(1982)「シテイル形式の意味記述」『人文学会雑誌』13-4 武蔵大学
- 工藤真由美(1987)「現代日本語のアスペクトについて」『教育国語』91 むぎ書房
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト―現代日本語の時間の表現―』ひつじ書房
- 鈴木重幸(1957)「日本語の動詞のすがた(アスペクト)について―スルの形と～シテイルの形」言語学研究会報告(『日本語動詞のアスペクト』1976 麦書房に所収)
- 鈴木泰(1999)『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト―源氏物語の分析―』ひつじ書房(初版 1992)
- 鈴木英夫(2001)「格助詞と動詞―「～に似る」と「～と似る」を中心に―」『日本語学』20-3 明治書院
- 高山百合子(2000)「完了辞・過去辞の統合をめぐって―「た」への統合史・素描―」『国語と教育』24 大阪学芸大学国語国文学研究室
- 築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 野村剛史(1994)「上代語のリ・タリについて」『国語国文』63-1 京都大学国文学会
- 野村剛史(2003)「存在の形態―シテイルについて―」『国語国文』72-8 京都大学国文学会
- 橋本修(2001)「古典日本語の完了形をめぐる研究動向」『「た」の言語学』ひつじ書房

福嶋健伸(2002)「中世末期日本語の～タについて一終止法で状態をあらわしている場合を中心に」『国語国文』71-8 京都大学国文学会

森田良行(1989)『基礎日本語辞典』 角川書店

森脇茂秀(2004)「動詞「似る」の意味用法について一平安初・中期の仮名文を中心に」『別府大学国語国文学』46 別府大学国語国文学会

山口堯二(1997)「完了辞・過去辞の通時的統合―「た」への収斂―」『日本語文法 体系と方法』ひつじ書房

山口堯二(2003)『助動詞史を語る』 和泉書院

湯沢幸吉郎(1954)『増訂 江戸言葉の研究』 明治書院

#### 【調査資料】

郭中奇譚(明和 6) 遊子方言(明和 7) 辰巳之園(明和 7) 南江駅話(明和 7) 俠者方言(明和 8) 南閩雜話(安永 2) 婦美車紫鹿子(安永 3) 古今馬鹿集(安永 3) 甲駅新話(安永 4) 寸南破良意(安永 4) 青樓楽美種(安永 4) 当世左様候(安永 5) 穴千鳥(安永 6) 広街一寸間遊(安永 6) 売花新駅(安永 6) 妓者呼子鳥(安永 6) 世説新語茶(安永 6) 郭中掃除雜編(安永 6) 大通秘密論(安永 7) 胡蝶夢(安永 7) 傾城賈指南所(安永 7) 契情買虎之巻(安永 7) 深淵情(安永 7) 一事千金(安永 7) 南客先生文集(安永 8) 深川新話(安永 8) 駅舎三友(安永 8) 粹町甲閩(安永 8) 伊賀越増補合羽之竜(安永 8) 喜夜来大根(安永 9) 娼註銚子戯語(安永 9) 真似山気登里(安永 9) 多佳余字辞(安永 9) 風俗砂弘伝(安永 9) 芳深交話(安永 9) 遊婦里会談(安永 9) 通仁枕言葉(安永 10) にやんの事だ(天明 1) 山下珍作(天明 2) 大劇場世界の幕なし(天明 2)

以上、『洒落本大成』中央公論社

金々先生栄花夢(安永 4) 高漫齊行脚日記(安永 5) 手前勝手御存商売物(天明 2) 巡廻能名題家 莫切自根金生木(天明 5) 江戸生艶氣樺焼(天明 5) 文武二道万石通(天明 8) 大極上請合売心学早染艸(寛政 2) 敵討義女英(寛政 7)

以上、『黄表紙 洒落本集』岩波書店 日本古典文学大系 59

東海道中膝栗毛(享和 2～文化 6) 『東海道中膝栗毛』岩波書店 日本古典文学大系 62  
浮世風呂(文化 6～10) 『浮世風呂』岩波書店 日本古典文学大系 63

春色梅児誉美(天保 3)

春色辰巳園(天保 5～6)

以上、『春色梅児誉美』岩波書店 日本古典文学大系 64

鳩翁道話(天保 10) 『心学道話集』有朋堂文庫

源氏物語 『源氏物語』岩波書店 日本古典文学大系 14～18

CD-ROM 版『新潮文庫の百冊』(1995 新潮社)

なお『日本古典文学大系』については、国文学研究資料館本文データベース検索システムを補助的に利用した。

—うえの さえ 早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了—